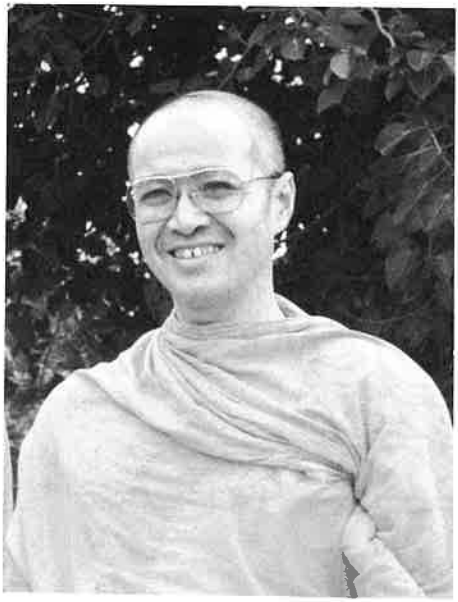
第四期育英会入選論文

トウドンと供養の旅

ワット・パクナムにて安居中　渋井　修



ワット・パクナムに入堂して以来十ヶ月目を迎えようとしております。この期間、ほとんどをタイ語の勉強に費しました。

その国の言葉を理解することがコミュニケーションの第一歩と考えたからであります。自分が成すべき行事、戒律、日常の様々なことがらにおいて、誤った解釈をしてはいけないというのはもちろんですが、まずタイの風土に溶け込んでみようと思いました。

タイ僧とのコミュニケーションがとれ、僧院

の生活に慣れてくるに従い、この国で成すべきことがだんだんと明確になってまいりました。

それはトウドンです。

トウドンとは、煩悩のほこりを払いのけ、仏道を求めるために衣食住を貪らずひたむきに仏道を修行することである。その為に特に努めるべきことで次の十三種がある。

一、糞掃衣のみを着る

二、三衣のみを用いる

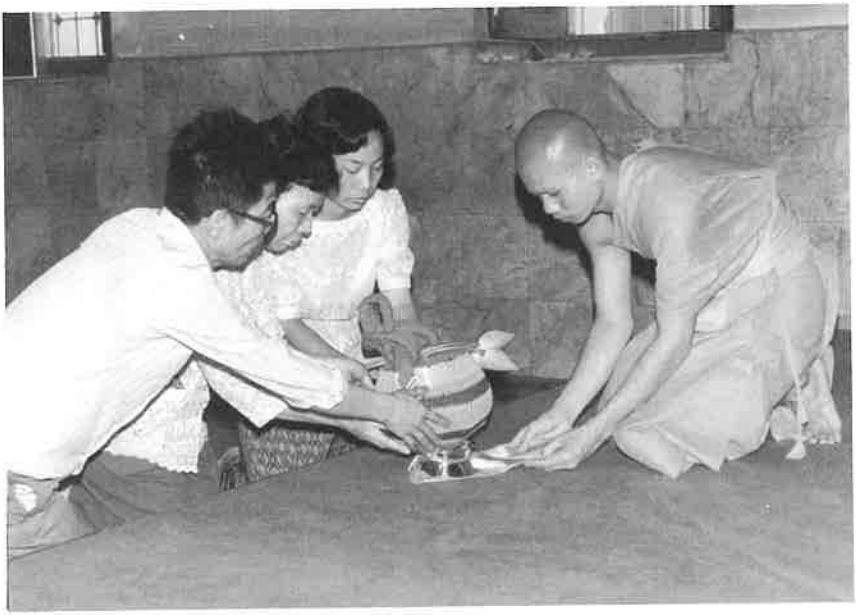
三、乞食して得た物のみを食べる

四、家を順番に托鉢して回る
五、一日一食
六、鉢中の物を食べる
七、食べ終わった後で献じられた物は食べぬ
八、森にのみ住む
九、樹下にいる
十、露地にいる
十一、墓地にいる
十二、人が設けてくれた所にいる
十三、眠らずに座っている

タイ日辞典（富田竹二郎著）より

タイ上座部仏教においては二二七の戒律が厳しく定められていることは周知の事実ですが、このトウドンは、遊行、行脚の際、特に重んじられるものです。

これらの種の戒は時代にそぐわないものもあり、現在では少しづつその形を変えてきてはいます。このトウドンを一年に三ヶ月から四ヶ月



行じながら、五年から十年の期間を設けて、タイ全土を歩こうと計画いたしました。

自分の足で見、その土地の僧や人々と語り合い、その土地の文化、生活、習慣、物の考え方、気質、仏教のつながりなどをじかに肌で感じ取りたいと考えます。

もう一つの目的はカンボジアに供養の行脚をすることです。

十年程前、ポルポト政権下で一〇〇万とも二〇〇万ともいわれる人々が虐殺されました。虐殺とは、殺される側にとって、殺される何らの理由もなく、殺す側の一方的な論理、強制によって言論や行動の自由を奪われ殺されてしまうことです。

当然のように、殺される側の人々にとっては、〝何故、どうして〟という悲痛な叫びが、あったはずです。この〝何故、どうして〟という叫び声の裏に、なすがままに殺された人々の怨念

は、今もなお戦火のいえぬ土の上に生き続けています。虐殺をまぬがれた人々にとっても、この悪夢のような出来事は生涯忘れ得ぬものでありましょう。

虐殺された人々、虐殺をまぬがれた人々の魂と心にわずかでもやすらぎを与えない限りこの国の平和も発展も望めません。

たとえ非力でも、一歩毎に経を誦する供養の旅をせずにはおれません。

幸い、カンボジア入国の手続きをすることができました。カンボジア政府が私の入国を許可してくれるまでたとえ何年でも辛抱強く待つつもりでした。

私の供養の旅はカンボジア一国にとどまるものではありません。ラオス、ベトナム、安らぎを願う声なき声に導かれて、どこまでも旅を続けることが、私の僧たる使命と感じております。